箱根の鳥の特長　植生帯と鳥の垂直分布

伊豆川哲也　2023R5-5-29

1.　箱根の野鳥の特長

残念ながら、鳥は移動性が高いから、鳥では箱根の固有種や固有亜種は居ません。
なので、箱根じゃ無いと見れない超目玉商品的な鳥は、じつは居ません。
しかし、森、草原、湖、渓谷、風衝地帯などの多様な自然環境があるため、美しい鳥、人気の鳥が結構います。

1.1 箱根の植生帯と鳥の垂直分布

図 1-1

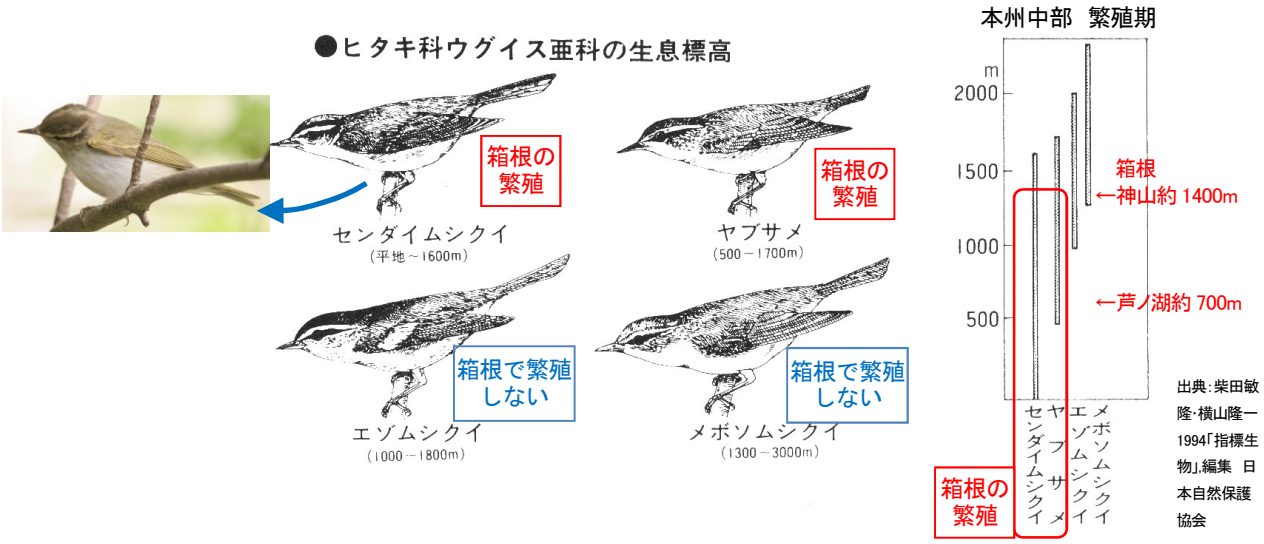


図 1-2

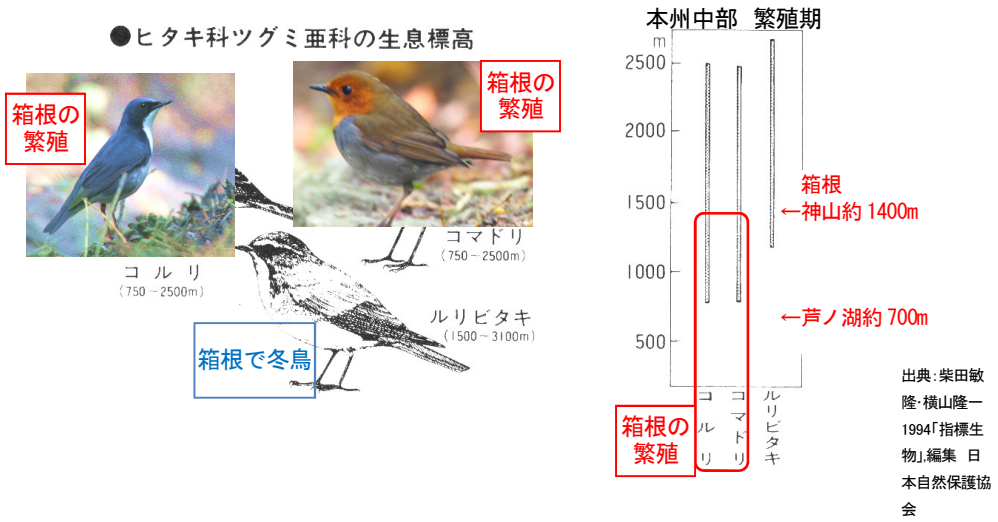
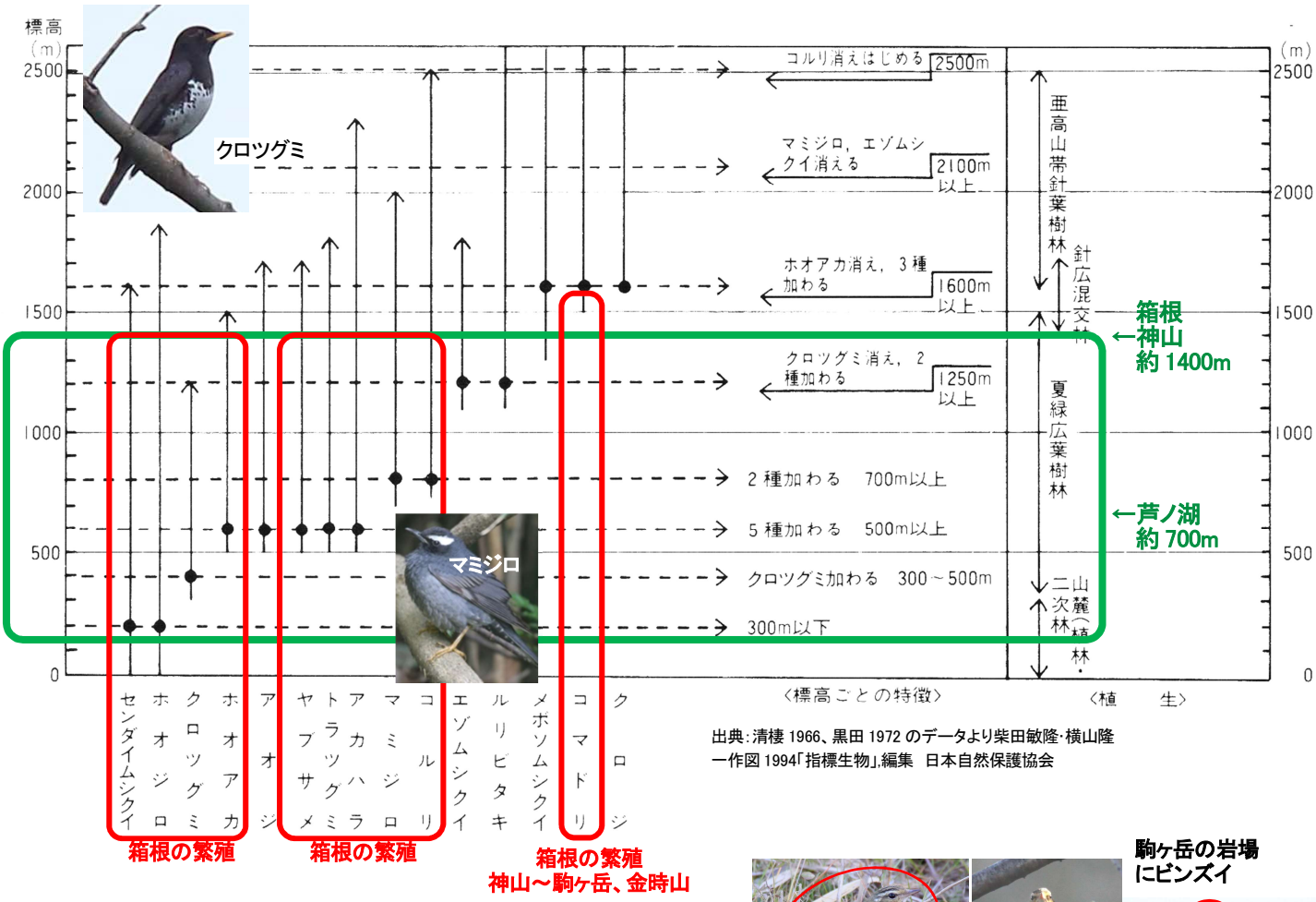


図 1-3　箱根と本州中部山岳地方の標高毎の鳥類（繁殖期）



出典：清棲 1966、黒田 1972 のデータより柴田敏隆・横山隆一作図 1994「指標生物」,編集　日本自然保護協会

表 1-1　本州中部と箱根との鳥の垂直分布　伊豆川 2023

垂直分布	本州中部　日本アルプス		箱根　神山 1437m、芦ノ湖　約 700m		
	植生	繁殖する鳥	植生	繁殖する鳥	越冬期に高い山から降りてくる
高山帯 森林限界 2000m	ハイマツ帯	ライチョウ イワヒバリ カヤクグリ	なし	いない	
亜高山帯 1400m	ダケカンバ林 アオモリトドマツ（オオシラビソ）林	ホシガラス ルリビタキ キクイタダキ ビンズイ	なしだが、二子山山頂、駒ヶ岳山頂は、風衝地帯のため亜高山に近い	ビンズイ	
山地帯 神山～芦ノ湖 500m	ブナ帯 シラカバ林	コマドリ コルリ ウソ	ブナ帯 ヒメシャラ林	駒ヶ岳や外輪山の尾根にコマドリ コルリ	カヤクグリ ルリビタキ キクイタダキ ビンズイ ウソ
低山帯	ミズナラ帯 コナラ	キビタキ オオルリ	ミズナラ帯 コナラ	キビタキ オオルリ	

箱根に亜高山は無いため、箱根で繁殖している真の亜高山鳥は**ビンズイ**だけ

コマドリや**コルリ**も本州中部では、山地帯から亜高山まで繁殖してるので、広義の亜高山鳥ともいえる。

冬になると、高山鳥、亜高山鳥が、低地へ**冬鳥として降りて**くる。標高移動する鳥を**漂鳥**という

1.2 草地性の鳥

キジ、カワラヒワ。

ホオアカ　仙石原の湿原とススキ草原で 2016 年頃まで､4 ペア程度が繁殖。2020 年以降は繁殖期に確認できず（伊豆川）。繁殖絶滅？。

セッカ　箱根では夏鳥　仙石原湿原でごく少数が繁殖していた。近年情報無し。

オオヨシキリ　夏鳥　繁殖期絶滅。仙石原湿原で 2010 年頃までは湿原中央のヨシ原に、高密度で生息（山口喜盛）。しかし 2019 年頃、繁殖しなくなった(繁殖絶滅)（山口喜盛）。小田原の酒匂川のヨシ原や小田原鬼柳の休耕田のヨシ原では毎年繁殖。

コヨシキリ　夏鳥　繁殖期絶滅。　1930 年に仙石原で確認（県・大箱根国立公園協会、大箱根国立公園 1930）、1951 年に仙石原で確認（田代道彌 1951 しろだも）。現在、県内では渡り途中の個体がヨシ原に立ち寄る程度で繁殖せず。

ノビタキ　夏鳥　繁殖期絶滅。　1930 年に仙石原で確認（県・大箱根国立公園協会、大箱根国立公園 1930）、1951 年に仙石原で確認（田代道彌 1951 しろだも）。現在、県内では渡り途中の旅鳥として宮ヶ瀬ダム等の草地で少数が記録される。

オオジシギ　夏鳥､繁殖期絶滅。　仙石原湿原で繁殖していた｡その後 1990 年までの数年間、1 羽のみ渡来。その後記録無し。湿地を土木開発してゴルフ場を作ったので、昔は、鳴きながら急降下する飛翔にゴルファーがビックリしていた。

「スビーヤク、スビーヤク、スビーヤク、ジュジュジュジュジュ」

1.3 草地から林への遷移途中の疎林、湿地の先駆性樹林の鳥

先駆性樹林とは、箱根では、仙石原湿原や仙石原の早川沿いの湧水地帯「温湯」の明るいハンノキ・ヤシャブシ類、ヤナギ類の林。地下水位が高いため根腐れによりブナやミズナラ等の林へ遷移しない。本州では雪崩跡地や地滑り跡地に先駆性木本としてハンノキ林、シラカバ林などが一時的に成立する。

ノジコ　夏鳥　1990 年代までは､仙石原湿原の温湯の明るい林で繁殖していた(伊豆川私信)。2000 年 7 月ノジコ（原田育生私信）以降は繁殖期中盤で記録がない。近年は渡り期に記録があるが、渡り途中の休息個体の可能性が高い。

アオジ　渡り途中の個体が立ち寄る程度で繁殖せず。越冬期は普通。
かつては仙石原で普通に繁殖していた（佐藤勝信、箱根の鳥 1985）。

1.4 遷移が進んだ樹林の鳥

フクロウ　留鳥　夜鳴き声（真冬～春）が聞こえる。大木の樹洞に営巣。風切り羽の消音構造が特長なので、風切り羽を拾うと判る。畑引山（森のふれあい館の森）の湖岸で鳴き声 2018 頃。九頭龍の樹木園近くの県道で風切り羽。

サンコウチョウ　夏鳥　さえずり「月日星ホイホイホイ」と特徴的。里山の雑木林に意外にいる。薄暗い高木林内の細い下枝に小枝と苔で造巣。

アオバト　留鳥　「アオーアオー」と変な声が森に響く。箱根にも周年いるが、なかなか姿が見れない。神奈川県内では大磯町の照ヶ崎海岸の岩礁部に海水を飲みに来るのが見

やすくて有名。海水飲み行動は全国であるが、海水を飲まなくても繁殖できる。

アカショウビン　特徴的で尻下がりの「キョロロロロ」。1996 年に湯河原町の天照山神社の白雲の滝近くの樹洞で営巣し巣立った。早川渓谷で希に声を聞く（室伏友三、箱根の鳥 1985）。

1.5 岩場の代わりにコンクリ構造物で営巣

イワツバメ　雛に給餌する親

イワツバメコロニー（集団繁殖地）夏鳥　壺を半切りにして天井へひっつけた形。狭い出入り口。泥製。

●箱根町役場本庁舎ひさし裏。
●芦ノ湖周辺でも数カ所
●地球博物館東の早川の太閤橋の桁裏
●小田原市早川漁港の屋根裏

↑参考：ツバメの巣は、お椀型で上部が空間

ヒメアマツバメ　留鳥　イワツバメの巣を乗っ取り、羽を大量に付着させる。

●箱根町役場本庁舎ひさし裏にコロニー。
●小田原市役所本庁舎　　●小田原早川港の西湘バイパス

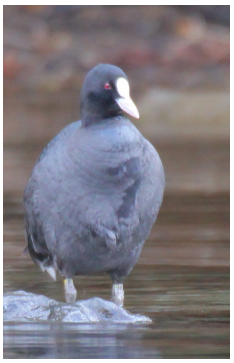
イワツバメ、ヒメアマツバメのコロニー箱根町役場本庁舎のひさし裏

1.6 増えた鳥

ソウシチョウ　特定外来生物
　笹藪繁殖性なので、落葉広葉樹の笹林床営巣のためウグイスやコルリと営巣環境で競合。ペットの逃げだしの他に、洗顔化粧品「ウグイスの糞粉」の代用品の糞を取るための飼育が逃げだし。

ガビチョウ　特定外来生物
　「キョロリ、キョロリ」とクロツグミやソウシチョウに似たさえずりだが、「ギョエー、ギョエー」と濁り音を混ぜることが多い。声が美しく編曲も豊富なのでペットとして江戸時代から輸入飼育されていた。

イソヒヨドリ　留鳥
　仙石原でも 2021 年繁殖（箱根カントリー倶楽部金澤仁史）。全国的に内陸のやや開けた環境へ進出中。世界的には、昔から内陸にもいる。



オオバン　冬鳥
　芦ノ湖で 2000～2010 年に増えたが、2010～2022 年は約 100 羽で増減無し。県内各地の川や池でも 2000 年～2010 年頃に増えた。

ハジロカイツブリ　冬鳥
　芦ノ湖に昔から約 10 羽いたようだが、2016 年頃からやや増加し約 30 羽。

1.7 今後増えそうな鳥

リュウキュウサンショウクイ　沖縄九州から分布拡大中。神奈川県でも繁殖開始で留鳥化。

ジョウビタキ　冬鳥であったが八ヶ岳西麓で別荘地、住宅地で留鳥化し繁殖開始。繁殖分布が年々、拡大中。緑の多い住宅街で、樹洞の代わりに民家の隙間（雨戸の戸袋、郵便ポスト、外壁のつなぎ目の隙間）から入り込んで営巣。ムクドリやスズメに似た営巣特性。

トモエガモ　冬鳥　日本海側で主に越冬渡来している。片の鴨池が有名。片の鴨池では伝統の「坂網猟」を持続させるため鴨の餌場保護として冬みず田んぼ米が販売されている。近年、渡来数が増加し、太平洋側で 2021 年頃から越冬記録がやや増え始めた。

箱根カントリー倶楽部（ゴルフ場）イタリ池 2023 年 2 羽、2021 年 2 羽

1.8 水面採餌カモの減少、芦ノ湖のオシドリがいなくなった歴史

別紙参照。カモグラフ。日本野鳥の会神奈川支部報 2022.5～10 月号に伊豆川が連載記事。